



Veritas No.9 (1999.12.15)

目次

<特集> 「共通言語としての英語学習の功罪」

論争への誘い-----浜下昌宏

コンピュータ・ネットワークにおける文字コードについて
-----三浦欽也

英語学習の功罪-----孟真理

英語を学ぶ人のために-----難波江和英
(著者ABC順)

<研究室から>

社会学者のメチエ-----小松秀雄

<岡田山を知ろう>

茶室 松風庵-----中井哲男

<私と図書館>

可能性の扉-----北川真優美

<特集>「共通言語としての英語学習の功罪」

論争への誘い

浜下昌宏 総合文化学科教授

提題：英語学習の効用、あるいは、英語は必要か？！

提題の説明：今日、英語は世界の共通語の観を呈している。英語を公用語とする英米豪、インド、シンガポール、などにおいてはいうまでもなく、その他の地域やアジアを旅するときですら、英語は必須である。ビジネスの世界ばかりでなく、学問の世界ですら、英語による報告や議論は慣例化している。そうした世界の流れにおののいたのか、わが国の文部省までも、幼少期からの英語学習を奨励すべく私塾の支援をするという。たしかに、英語習得は、いわゆる国際化の最低条件かもしれない。そして、我が神戸女学院は英語教育の伝統で世間の評価を得てきたといっても過言ではない。だが待てよ、と私は言いたい。ほんとうに英語学習は必要なのか、あるいは、英語ゆえに私たちの精神は麻痺しているのではないかと。あるイタリア人の学者は、日本で開かれる予定の国際学会ではラテン語を共通語にできないものかと問い合わせ、英国以外のヨーロッパ人の学者は初対面で何語で話しましょうかとまず問い掛ける配慮を見せる。かつて私が古代ギリシア語を学んだとき、教科書に出てきた文例の「最高の医者とは時である」に知恵を教えられたが、英語の教科書の過去完了の用法例の「私が駅に着いたときには汽車はすでに出発していた」にはバカバカしくて笑ってしまった。むろん私たちは英米人を尊敬すること、英米文化に関心を持つことと、英語の勉強とは区別している。しかし、イギリス在住のインド人から聞いたことだが、反英感情ゆえに話せる英語もわざと話さずにいる仲間もいるという。実際、英語を母語とする人たちの他言語にたいする無知ゆえに、またその横柄さゆえに、私たちの英語学習へのモチベーションもときに衰える。

さて、英語学習する(しなくては、と思っている)自分をどう納得させるか、あるいは、英語を無視する国粋主義者の道を取るべきか……。議論を促し、論争の始まることを乞い願いつつ……。今回、英語を母語とする論者の寄稿が得られなかったのは、たんにお忙しかったからである。もし可能であれば、次号以降も更なる論争を続けたい。

コンピュータ・ネットワークにおける文字コードについて

三浦欽也 人間科学科助教授

語学はどちらかというと苦手な方なので、「英語学習の功罪」というテーマからは少し離れてしまうのですが、コンピュータにおける「文字コード」について、歴史的な経緯を振り返りながら、現在かかえている問題点をいくつか触れたいと思います。ここには、言語に対する考え方のようなものが少なからず現れているように(個人的には)思うからです。

「文字コード」とは、文字情報をビット列(0 と 1 の並び)に符号化する仕方を規定するものです。コンピュータはいかなる情報もビット列としなければ扱えませんから、文字情報処理を行うためには、「文字コード」によって文字の並びをビット列に変換しなければならないわけです。

この「文字コード」に関しては、コンピュータや情報通信の世界では、以前から、ASCII コードと呼ばれる文字コードが事実上の標準となっており、この状況は現在でもそれほど大きくは変わっていません。世界中のあらゆるコンピュータ、あらゆるソフトウェアで、問題なく扱える文字情報は、現在のところ ASCII コードしかないといってよいでしょう。

ご存知の方もありますが、この ASCII コードというのは、本来アメリカの国内規格であり、当然のことながら、英語を表記する文字セット(いわゆるラテン文字、数字と若干の記号)しか符号化できません。これは、コンピュータ、特にパーソナルコンピュータの研究開発が、主に米国主導で行なわれてきたことの反映でもあります。

したがって、英語以外の言語のテキスト処理のためには、各言語に固有の文字を別途符号化し、それを使用する必要があります。しかしながら、コンピュータシステムを使用する際の命令等の互換性を考慮すると、ASCII コードとも互換性を持たせる必要があります。英語と大半のアルファベットを共有する言語では、ASCII の一部の文字を各言語特有の文字に置き換えたコードを使用することもありましたが、先に述べた互換性の面から不都合を生じる事も少なくなく、最近ではあまり使用されないようです。

一方、通常コンピュータでは、1文字を 8bit(8個の 0 or 1 の並び、octet とも呼ばれます)で処理をしますので、最大 256(=2 の 8 乗)種の文字を表現できることとなりますが、そのうち ASCII は、(制御文字も含めて)128(=2 の 7 乗)文字分しか占有しませんので、残りの 128 文字分を各言語特有の文字に割り当てることも最近は多くなっています。漢字文化圏以外の大半の言語では、この 1 octet の範囲で何とか文字を表現し、テキスト処理を行なえるようです。

しかしながら、(最近でこそ少なくなってきましたが)英語圏で開発されたソフトウェアの中には、テキストが 7bit コードで表現されていることを前提として作成され、1 octet 分丸々を文字コードとして取り扱えないものが多数存在していました。そのようなソフトウェアを各言語に対応させるには非常に面倒な作業が必要でした。

漢字文化圏では、事情はもっと深刻でした。漢字をまっとうに扱うには、文字コードとして少なくとも 2 octet が必要で、それを 1 octet の ASCII と混在させるという複雑なコード系が作られ、使われてきました。

いずれにしても、英語圏のソフトウェアは、他言語に対応させることをあまり考慮せずに開発されたものが多く、他言語対応は大抵、非常に困難で、それらの面倒な作業は、必要とされる各国の負担となるのが通常でした。

状況が少し変わってきたのは、この 10 年くらいのことです。インターネットの拡大や、漢字文化圏へのパーソナルコンピュータの普及に伴い、世界の諸言語の文字コードに関する国際的な共通規格を作成する機運が高まってきました。もっとも、これとても、非英語圏のユーザの便宜を図るというよりは、英語圏(特に米国)のコンピュータ業界が、有望な市場となってきた非英語圏へのコンピュータおよびその関連機器の販売を拡大するため、というのが当たっているのではないかと思います。

動機はともあれ、1980 年代の半ば頃から、ISO を中心に参加各国の協力で国際文字コードの制定が進められ、その結果として、1989 年にドラフト案が制定されました。これは、それまでに ISO に登録されていた各国の文字セットをそのままの形で包含するような 4 octet のコードで、基本的には上位 2 octet で(各国の)文字セットを指定し、下位の 2 octet で(各国の文字セット内での)文字を指定する(1 octet で表現される文字セットでは最下位の 1 octet で指定する)という形でした。また、上位 2 octet が固定する(すなわち文字セットを固定する)場合は、それを省略して、2 octet (ないし 1 octet)に短縮して表現してもよいという合理的なものでした。

ところが、このドラフト案が正式に決定する直前に、米国のコンピュータ業界の主導で「Unicode」と呼ばれるコードが開発され、その横槍によって、このドラフト案が否決されてしまいます。この Unicode は、以下のような特徴を持ったものでした。

- a. 2 octet の固定長である。
- b. 固定された 2 octet の領域に、全世界の文字を収める。
- c. a.、 b. を実現するために、日中韓の漢字コードは別個に収録せず、

共通の字形を持つものを「統合」する。

米国のコンピュータ業界がこれを協力を推進したのは、ソフトウェアが作りやすく (a.の特徴による、短縮法などを考慮する必要がない)、一度作ってしまえば、まったく修正せずに非英語圏の諸言語にも対応できる (b.の特徴による)、という理由によると思われる。これだけなら、非常に結構なコード系であると言ってよいかもしれませんが、問題は c. です。もともと a.、b. を実現するにはかなりの無理があって、そのためのしわ寄せが漢字コードに来ているとしか思えないのです。(実際、いわゆる「ラテン文字と同じ起源の文字」を使う言語については、「統合」されることなく、国別に文字セットが確保されているようです)

Unicode に対する批判も、多くがこの漢字「統合」に関するものでした。実際、当初の案では統合の基準が明確でなく、かなり混乱した状態だったようです。たとえば、同じ起源であるが国によって字形の変わってしまったような漢字が、あるものは統合され、他のものは統合されていないとか、また、異なった起源であっても、見かけ上たまたま同じ字形であるような漢字が、統合されていたり、いなかったり、というようなことが、多く見られたようです。

その後、Unicode は、米国のコンピュータ業界の圧力もあり、事実上、ISO の標準となりました。現在は、残念なことに、じわじわと “de fact standard” になりつつあるようです。

さて、この Unicode ですが、私見では、以下のような問題があると思います。

- i. 同じ字形であっても、国(言語)によって書体が微妙に異なる文字を区別する方法がない。
- ii. 文字(特に漢字)は時代によって変化していくものであり、未だ Unicode に収録されていない漢字も数多く、いずれにしても、2 octet 固定長の文字コードでは、いずれ破綻をきたすのが目に見えている。
- iii. 漢字は 1 つの言語文化の中で、徐々に変化していくものであり、言語と独立に字形を云々することは無意味であるし、「統合」の基準を明確にすることは不可能である。

これらの問題については、Unicode の推進者も気づいているらしく、最近では、i. の問題に対しては、文書レベルで言語を指定する機構を作って補う、ということになっているようです。1 つの文書内に複数の言語が混在するときのことを考えると、頭が痛くなりそうです。ISO の当初のドラフト案のように、言語別に文字セットを用意した方が、かえって簡単だったのではないかと思います。

また、ii. の問題については、Unicode の利点の 1 つだった a. の特徴を放棄し、「サロゲート」と呼ばれるしくみを導入して、一部に 4 octet のコード系を混在させることにしたようで

す。結果的に、2 octet と 4 octet のコードが混在する、かえって複雑なコード系になってしまっています。

iii. については、個々の文字の統合については、批判を取り入れて細かい修正を行なっているようですが、所詮、泥縄という印象が拭えません。

結局、漢字の「統合」は、効率を求めて行なわれたにもかかわらず、逆に問題を複雑化し、かえって効率を悪くする結果になっているように思われます。

文字コード、特に Unicode についての、このような状況を振り返るとき、そこには非漢字文化圏の人々の、漢字に対する理解不足があったように思われます。いささか偏見になるかもしれませんが、その背景には、非漢字文化圏の人々の、漢字に対する偏見(「非効率な絵文字」、「いずれ淘汰される過去の遺物」、などなど)が見え隠れしていたように思われます。また、同じく「漢字」を使う文化圏であっても、国によって、たとえば日中韓で、文化が異なるということ、あるいは、他の言語でも日々「新語」が作られていくように、漢字も「新字」が、徐々にではあっても増えていく、という視点が欠けていたように思われます。

それらは結局、他言語、ひいては他文化に対する無関心から来るように思われます。この傾向は、(これも偏見かもしれませんが)英語圏、特に米国の人々に強いように思われます。英語が「世界語」であるという自負があるのか、あるいは自国の文化が世界の文化をリードしているという意識があるのかも知れません。Unicode のバリエーションの 1 つに、ASCII 文字だけは 1 octet のコードで表現して互換性を取り、それ以外の文字を 2 octet 以上の可変長で表現するという規格がありますが、そのようなものを平気で作ってしまう無神経さは、少し理解を超えるものがあります。

※ 以下に、インターネットで見つけた参考となるページをまとめておきます。[1]は、文字コード全般に関するわかりやすい解説です。[2]は、Unicode 問題について、拙文より遥かに正確に、また詳細に論じています。[3]は、Unicode 問題に関する対論になっています。

参考

[1] 伊藤隆幸、文字コードの話 (1996~1999)

<http://hp.vector.co.jp/authors/VA001240/article/charcode.html>

[2] 加藤弘一、文字コード問題早わかり 4 ユニコード篇 (1997)

<http://www.horagai.com/www/moji/code4.htm>

[3] 和田英一、Unicode は好きですか、「情報処理」、Vol. 39 No. 4(1998-4)

<http://www.etl.go.jp/etl/bunsan/ipsj/9804/index9804.html>

英語学習の功罪

孟真理 総合文化学科助教授

こんな挑発的なテーマを図書館長からいただいて、いささか困惑しているのだが、まず確認しておきたい。英語を学ぶことから得られる大きな利益に、ここで異論を唱えるつもりはまったくない。英語はとてつまいみちの多い、超お買い得な言葉だ。世界のかなり広い地域に分散して存在する「英語文化圏」の言語であるばかりか、いまや、非英語圏も含め世界中を行き交う人や物や情報の大半にとまなう「国際（補助）語」としての地位を揺るぎないものになっているのだから。

けれどもそれとともに、このただひとつの国際語によって「国際化」が果たされるかのような思い込み、国際化＝英語化という短絡も、ますます幅を利かせるようになっていく。この現状には、（ドイツ語という「第二外国語」担当者のひがみも加わってだろうか？）違和感と危惧をいだかずにはいられない。

「お買い得品」にはそれなりの危険がひそんでいるものだ。そのひとつに注目しよう。「英語文化圏の言語」と「国際（補助）語」という二つの顔が、原理的に区別しがたいものであること。そうした中で、外国→英語→英米という単純な観念連合が、いとも簡単にできあがる。ここから「国際化」の時代にふさわしからぬ古典的「外国」観がでてくる。

例1：「外国では…、日本では…」という好んで用いられる二分法。まるでひとつしかないかのようなこの「外国」は、しばしばアメリカをさす。「諸外国」になっても、せいぜい欧米諸国だ。例2：「外国人と英語で話そう！」といった、英会話学校のキャッチフレーズ。ここで私たちの多くがおのずとイメージする「外国人」は、白人のネイティブ・スピーカーであって、英語を学んだアジア人ではないだろう。例3：文部省は、小学校からの英会話教育を導入しようとしているらしい。動機は日本人の「英会話コンプレックス」だろうか。「ガイジンさんは英語を喋る」という幼い固定観念をつくることにならなければいいのだが。

どうしてこうになってしまうのか。「国際補助語」の話からはじめよう。世界中の数千の言語すべてを学ぶだけの暇も力もない私たちにとって、さまざまな母語を持つ同士が、ある共通語で意志の疎通をはかることができるというのは、たしかに便利である。けれどもその仲介となる言葉は、本来、特定の文化的価値観に偏らない無色透明のものであることが望ましい。(たとえばエスペラントなどの人工言語は、そのころみだった。)つまり国際補助語としての英語は、自らの文化的出自から切り離された、透明な共通言語となることを求められている。中国と日本の間にかわされる英語に、英語圏文化が介入する必要はないし、日米中の対話で、常にアメリカだけが自分の文化圏を後ろ盾にもつのは、不公平だからだ。

けれども理屈はともかく、英語圏の歴史や文化と密接に結びついて生成してきたことばを、実際にその伝統から切り離すことは、当然ながら不可能だ。「唯一の超大国語」とでもいうべきものになりつつある英語がいくら中立を標榜しようと、「商習慣」にせよ「人権」にせよ、その「グローバル・スタンダード」に、英語文化圏とりわけその「正統」とされるアングロ・サクソンの価値観が入り込むことは、避けられない。英語学習に話を戻せば、「国際語」と英米文化圏の英語を区別して学ぶことはできない。私たちは結局、英米の英語を規範として受け入れざるをえないのだ。

それならどうすればいいのか。まず、「グローバル・スタンダード」に紛れ込んでいる英米文化を、むしろはっきり見すえてはどうか。つまり、英語圏文化の「特殊性」を、善し悪しは別に、抽出してみても。そもそも、外国語を学ぶおもしろさは、その文化の歴史の厚みや人間の生活の多様性の、そのきわめがたい奥深さに分け入っていくところにあるのだから。ここから文化研究が始まる。

むしろ「特殊」なのは英語圏の文化だけではない。世界中には多様な言語、文化、価値観があって、アメリカも日本もドイツも中国も、たくさんの特異のひとつとして同等の価値をもっている。これらもぜひとも覗いて見比べてみたい。「国際語」による意志疎通はそこへの接近の第一歩となろうが、さらに英語以外の言葉を学ぶことで、これら別の「特殊」が、身近なものとして迫ってくる。英語だけでは見えてこない、世界の多様性が、立体的に開けてくるだろう。

英語力に磨きをかけるのは大いに結構。だがそれがマイナー言語話者からメジャー言語話者への出世による、強者のまなざしへの同化とならないことを切に願う。言語と文化の多様性を切り捨てて一元化するのではなく、無数の違いから成る世界への関心と寛容さへの第一歩となる、そんな英語を(そして他の外国語を)学んでほしい。

英語を学ぶ人のために

難波江和英 英文学科助教授

高校2年生のころに英語で生計を立てると決めたときには、大学で教えることになるとは思っていなかった。どんな職業につくかはわからなかったが、とにかく英語の実力をつけなければと必死だった。日本の大学に入学後すぐに休学して、計画どおりオーストラリアの大学に聴講生としてもぐりこんだのは、そのやむにやまれぬ思いのあらわれにほかならない。日本という国に(いまも幾分そうだが)嫌気がさしていたのも事実である。貧乏だったが、生きる意欲はありあまっていた。よく勉強もした。オーストラリアには1年ほど滞在したが、最後のころは資金が尽きて、同じ安アパートの住人たちに誘われて電動芝刈り機の工場で働き始めた。1日平均12時間の肉体労働を2ヶ月ほど続けた。日本に帰ってからも、皿洗い、ウェイター、電話交換、(英語関係では)予備校、通訳、企業の翻訳、ホテル等の従業員の英会話など学生時代にはいろいろな仕事をしたが、あれほどつらい仕事はなかった。あのころは、生きることと英語を学ぶことが、ほとんど同義語だった。そのおかげで、英語が文字どおり「身についた」。だから私はいまでも、「楽しく身につく英会話」というのは信じられない。

英語にかぎらず、語学教育では、その言語を「身につける」ことが大切である。たとえば喜怒哀楽を日本語で感じられなければ、日本語が「身につけている」とは言えない。同じことが、外国語の場合にも言える。もし外国語を身につけたければ、外国のことを学ぶより、ひたすら自分自身を表現することを勧めたい。外国に行って語学が上達するのも、外国のことを知ったからではなくて、自分自身を表現せざるをえない機会が増えたからにすぎない。発音や文法の誤りを含めて、失敗を恐れてはいけない。正確な表現を目標とするのはよいとしても、あまり「正しい英語」を意識しすぎて萎縮したのでは本末転倒である。それより、自分自身の考えていることを日頃から(日本語でもよいから)明確にして、それを外国語で表現できるように準備(練習)しておくことである。これからの日本人には、ますますその力が求められている。たとえば、よく日本人は(白黒のつかない)「グレー(灰色)」であると海外で批判される。しかし(誰から見ても「グレー」であるケースは論外として)その種の批判を甘んじて受けているだけでは、まったく「国際交流」は進まない。日本人がみずからの「グレー」を「詫びる」ことばかりではなくて、日本人が「グレー」に見えるのは、相手が「白黒」を重視する文化のなかで育ったからであるとその相手に「教えてあげる」ことも重要である。このレベルの英語力を身につけている日本人は、残念なことに、まだまだ少数である。これからの英語教育は、たくましい思考力を基礎にして、堂々と自己表現のできる人間を育てることに目標を置くべきである。

<研究室から>

社会学者のメチエ

小松秀雄 総合文化学科教授

このたび国内留学という機会（1998年10月1日～99年9月30日）を得て、京都大学大学院文学研究科社会学研究室でいくつかの演習に参加し、大学院生たちの多様な研究報告を聞きながら、最近の若い研究者の問題意識と社会学の新しい動向を感じ取ることができた。身体技法や女性をめぐるテーマ、あるいは日常生活や民族に関わるテーマが多くなり、方法論的には既存の理論的枠組みの他に会話分析とライフヒストリーの手法、および知識社会的アプローチが増えてきたものだ、という印象を受けた。このような動向は、京大社会学の学問的風土（特に先生方の研究テーマや指導方針など）と女性の研究者の増加による影響もあるが、日本社会学会大会の研究報告を見てもどこことなく類似しているようにも思われる。私自身も、大学院生たちの研究報告に接して、自分自身のこれまでの研究を振り返ってみる気持ちになった。そのようなときに、改めてじっくりと読んでみたのが（まだまだ読み終えたとはとても言えないが）、主にピエール・ブルデューとマックス・ウェーバーの社会学的認識論の本であった。

ブルデューが提唱する反省的社会学、ないしは社会学的反省は自己自身の研究を振り返る際には、なかなか含蓄のある格好の言説であり、とりわけ『社会学者のメチエ』（初版1968年）という文献はいろいろヒントを与えてくれる。彼によれば、メチエ(metier：英語訳craft)というのは実践的にマスターするものであり、体の奥底にまで身につけるべきハビトゥス(habitus)である。六十才に近くなったときブルデューは、「私はちょっとばかり古参の医者のようなところがあって、社会学的悟性が陥りやすい病気をすべて知っている。――（これまで研究上のいろいろな失敗を経験したおかげで）私は、年季の入った職人のように、対象構成の原理を実践的に教えることができるのだ、と思っています。」（1991年版『社会学者のメチエ』の付録：インタビューより）と述べている。社会学者のメチエとはどうやら、知的職人としての社会学者が実践的にマスターすべき認識技能と職業倫理を融合したもの、いわゆるハビトゥスになるように思われる。職業倫理という側面に関しては、ブルデュー社会学では十分に煮詰められているとは言えないのでウェーバー社会学にヒントを求めた方が良さそうである。

それでは、社会学者の認識技能とは何か。『社会学者のメチエ』の中で、「認識論的切断→対象の構成→対象に関する仮説の経験的確認」という三段階の科学的行為を取り上げ、それらの行為の実践的技能を説明している。詳細は省くが、社会学にとどまらず哲学から自然科学まで幅広い分野から、名著と呼ばれる文献が選ばれ、認識技能のテーマに応じて文章が引用されながら、三段

階の行為のパターンと技能が論述されていく。ちなみに認識論的切断から対象の構成までの段階では、常識や自生社会学を文字通り「認識の中で一度切断」して、新たに概念定義と仮説の構築を進めるノウハウが議論される。切断と対象の構成の作業を実践する過程では研究者の価値観点と問題関心が重要な働きをするが、この点に関するブルデューの論述は、後ほど取り上げるウェーバーの社会科学認識論の語り口と呼応する。仮説の経験的確認のノウハウ、例えば実験や調査の技法に対する監視のノウハウも、「高度な統計学的手法の中立性＝科学性の幻想」を警戒するような語り口で議論されながら、メチエの中に適切に位置づけられていく。大切な点は、科学者個人によって一連の科学的行為を警戒し監視するだけでは不十分であり、科学者共同体を通じて相互主観的に警戒と監視を続けなければならないということである。

『社会学者のメチエ』は、ブルデューが研究者として自律した三十代後半に初版が刊行されているが、約二十年後のインタビューで自己反省しているように、いかにも教師の視点と語り口で教科書として作成されており、必ずしもメチエを実践的に伝達する書にふさわしいとは言えない。また、『社会学者のメチエ』から反省的 sociology が熟成するにつれて、『社会学の社会学』（1980年）や『ホモ・アカデミクス』（1984年）等において、科学者自らが絶えず自己の社会的経歴（軌道）と社会的位置を測定し、自己の言説の社会的存在拘束性を反省する努力を怠ってはならない点が強調されるようになる。そのようなことを考慮すると、『社会学者のメチエ』には欠点が少ないけれども、この書物を超えるような、実践的な社会学的認識論の文献はいまだに刊行されていないから、社会学者のメチエを考えるための最良の書であることには変わりない。

ところで、メチエの職業倫理的側面（学問と人生、ならびに学問と政治の関連を含む）に関しては、ウェーバーの『社会科学および社会政策の認識の客観性』（1904年）、『社会学・経済学における価値自由の意味』（1917年）、『職業としての学問』（1919年）が彼の壮大な比較宗教社会学的研究と歴史研究に支えられているので、最も深みのある議論を展開している。倫理的要素を軸に理念と利害状況を接合する、内面的起動力であるエートス(ethos)が、職業人としての研究者に関しても必要な資質となるが、その際に「理念－倫理－学問の関連」が問われなければならない。紙幅の都合上、結論だけを言えば、「価値から自由な」無前提の研究は幻想にすぎず、研究を推し進める強烈な問題関心は研究者個人の価値観＝理念と密接に関連しており、それぞれの時代が解明すべき課題として突きつけてくる問題と研究者の価値観＝理念との関係を絶えず反省し明らかにしなければならない。極端な事例を挙げれば、時代遅れの価値観を保持している研究者は、その時代の解明すべき重大な課題を察知することはできないために、その時代にとって普遍的意義を有するような研究を実践できないことになる。もちろん、どのようなテーマの研究が普遍的意義を有するのかは、アプリアリに決定されるものではなく、自由と平等の原則に基づく、学者間の学問的討議を通じて判断される。このような認識論的立場は、「科学者共同体における民主主義的な相互監視を媒介にしながら、認識論的切断から仮説の経験的検証までの作業を進めるべきである」というブルデューの言説と呼応する。

参考までに、望ましい事例としてウェーバー自身の学問的実践を引き合いに出せば、19世紀から20世紀への転換期に近代合理主義が欧米の文化と社会を支配しつつあるという趨勢を敏感に察知し、近代合理主義の特質を因果的に解明するという、まさに時代が突きつけてきた最重要課題を、ウェーバーは自らのライフワークとして引き受けた。そのために、社会学の基礎概念の体系を構築しながら、ヨーロッパ、アメリカ、アラブ、イスラエル、インド、中国、日本の社会を比較研究した。また、多元化した諸価値間の闘争（いわゆる神々の闘争）を眼前にしたウェーバーは、「私はリベラルなブルジョワ民主主義者である」と宣言し、近代合理主義の悪しき力を制御するシステムとして、マルクス主義と社会主義の限界を指摘しながら、個人の創意工夫を社会的に望ましい形で発展させることができる、リベラルな資本主義システムを選択した。さらに、知的職業人である研究者と職業倫理の関連を考えると、ウェーバーにとって最大の研究テーマの一つとなった、プロテスタントたちの世俗内的禁欲のエートスが、研究者である自己自身の職業倫理のモデルとなったと言えよう。注目すべきことは、既述の民主主義的学問的討議の原則も、プロテスタンティズムのエートスにおける公開討議の精神に由来する倫理の一つであるという点である。当時の歴史学派、講壇社会主義、ドイツ西南学派、マルクス主義といった多様な学派や政治的立場に対して、ウェーバーは果敢に論争を挑み、試行錯誤を繰り返しながら自己の学問的立場と研究の意義を構築していった。

近代合理主義の社会的文化的発展がますます高度化していった20世紀後半に、フランス独自のエピステモロジー（認識論）の下で育ったブルデューが提唱した社会学者のメチエは、ウェーバーが比較宗教社会学的手法で解明した勤勉、節制、誠実、公開討議の原則などの世俗内的禁欲の職業倫理をベースとする実践的認識技能であろう。このようなメチエは、先天的な技能ではなく、自己反省と公開討議を両輪とする試行錯誤の過程によって形成される技能であろう。

とりとめのないことをあれこれと書いてきたが、近代の問い直し、地球環境を考える等のテーマの議論が盛んになってきていることから推測されるように、人間は改めて自己反省すべき時代に置かれているようである。社会学者のメチエという言葉も、そのような時代を象徴しているのかもしれない。

（注）主な引用文献：ブルデュー他『社会学者のメチエ』（田原音和他訳、藤原書店）、ウェーバー『社会科学論集』（出口勇蔵他訳、河出書房新社）

<岡田山を知ろう>

茶室 松風庵

中井哲男 施設課課長

神戸女学院キャンパス内の北東に位置し、静かなたたずまいの一軒の和風建築がある。本学の構内に移築され、新たに「松風庵」と命名されたこの茶室は、室谷藤七郎の茶室として、須磨離宮前に創建されたものであった。室谷氏が表千家宗匠久田宗也に師事され茶の湯を能くされたことから、1937年、茶匠中川是足庵の設計にて立案され、数寄屋棟梁平田雅哉によって母屋西の庭内に設けられた。

須磨離宮に現存する母屋はヴォーリス建築事務所（W.M.Vories、一柳米来留）の設計によって、1934年に建築されたチューダーゴシック様式の洋館であるが、和洋二つの優れた建築の対比が美しい調和を創出していた。このたび神戸女学院のキャンパス内で最も美しいとされる宣教師住宅、ケンウッド館に隣接してその移築の場を得たことは、特筆すべき事柄である。ケンウッド館は様式こそ異なるスパニッシュ・ミッション・スタイルであるが、同じ設計者による等質の空間である。

本席は「数寄屋棟梁平田雅哉作品集」（1969年）にも収載された名席であったが、1995年の阪神・淡路大震災によって被害を受けた。室谷藤七氏の長女尚子氏は、その再建に際し、同じく震災で「松籟庵」を失った母校神戸女学院への寄贈を申し出られ、1995年夏より調査にかかり解体移築し1997年春、この地に再建された。

室谷藤七氏は材木商を営まれ、茶室の用材は自ら吟味されたもので、簡素な中にも現在では得難い素材の集積である。移築工事は一粒社ヴォーリス建築事務所ならびに株式会社永瀬より、その歴史的価値を保持し得るよう、当初材を活用した復元に努めながら、加えて新たな構造補強を施し移築再建したものである。

「松風庵」の名は室谷尚子氏が須磨の旧跡松風・村雨堂に因み命名されたものである。日本文化を語るに、一見の価値がある。



<私と図書館>

可能性の扉

北川真優美 英文学科3年生

皆さんはどれくらい、またどのように大学の図書館を利用されているのでしょうか。私はこの間初めて本の探し方というものを少し理解したような気がします。それは、新鮮な驚きであり、知ることの重要性について目が開かれた機会でもありました。授業で書くペーパーに使う資料を探していた時のことです。それまでの図書館の利用法といえば、図書を探すのみでした。しかし、その時に調べる必要があったのは、雑誌に掲載されている論文で、論文はコンピューター検索にかけることができません。雑誌類はカード棚から探すものだというのは知っていたのですが、探し方についてはよく分かっていませんでした。どうしたものかと悩み、司書の方に相談したところとても親切に教えて下さり、また探していたものも持ってきて下さって、大変助かりました。

実際、どのように調べたかといえますと、コンピューターを使って検索したのです。先程の話と違うと思われるかもしれませんが、女学院の図書館に最近入ったコンピューターによって、それは可能なのです。皆さんは女学院の図書館に、どのような図書、資料がこの世に存在しているか、またそれらはどこの図書館にあるのか、を検索できるコンピューターがあることをご存知でしょうか。これは、使い方が分かるととても便利なものです。まず、書名や著者名、キーワードを打ち込むことによって、それに関するありとあらゆる図書、資料を探することができます。ただ、例えば論文などであまりに有名な作品について調べると量が膨大になってしまいますけれども。もちろん、プリントアウトすることも可能です。そして次に実際に得た図書、資料のタイトルでどこにそれらがあるかを知ることができます。他大学にあると分かった場合は相互利用という方法もあるそうです。学内のみで探す時は文献のタイトルを先程述べたカード棚から探します。そうして、最後にカウンターに資料を請求することによって、探していたものとめぐりあえるのです。ここまでくるのは手のかかる作業だと思われるかもしれません。また、使い方に慣れるまで少しコツを必要とするところもあるでしょう。しかし、このように探すことによって、手に入れられるものが広がり、また私達の世界も広がるのではないのでしょうか。

私は教えて頂くまでこのような作業の方法を知りませんでした。知らなければあきらめてずっと探せないままだったでしょう。そして、探すこと事体に嫌気がさして、これからの隠れている出会いを見逃していくことになったかもしれません。それはとても残念なことだと思います。皆さんも調べ物がある時は、ぜひ一度使われることをお勧めします。今まで知らなかった世界に触れることのできる可能性の扉を開いてみて下さい。

<編集後記>

澄み渡った青空の下、時期外れの感のある紅葉が真っ盛り、でも学内では賛美歌を練習する歌声が聞こえてきて、もうクリスマスが間近なことが感じられます。

Veritas を編集する時はいつもイラスト選びがとても楽しみなのですが、今回はもちろんテーマはクリスマス。クリスマスツリー、リース、サンタクロース等のイラストを選んでいると、一つ間仕切りを隔てた自由閲覧室から、11月に始まったばかりの貸出パソコンのキーボードを叩く音が聞こえてきました。

近い将来、学内でパソコンを使える場所がもっと増えて、いろんなパソコンスポットで、最新号が出るたびに「興味ある記事が掲載されているだろうか？」とチェックしてもらえるような Veritas を作っていきたいものだと思っています。

恐る恐る始めたオンラインでの Veritas 発行もとうとう3号目（Veritas no.9）を迎える事ができました。お忙しい中にもかかわらず、原稿をお寄せ下さいました、先生、学生、職員の皆様本当にありがとうございました。

来年は西暦 2000 年、神戸女学院にとっては創立 125 周年という記念すべき年になります。学院にとって、この年が大きな飛躍の年になることを願って 1999 年最後の編集後記といたします。

Merry Christmas & A Happy New Year ! (Veritas 編集部)